

ミオヤの光

炎光の巻

炎王光（宗教人類—消極—理感二性の素質。積極—靈化）
三聚衆生
神人の致一と分別
宗教の機能的致一
如來と衆生との分別
如來と衆生との致一
世界の所依
生滅撰取の二義
世界と心靈界
世界厭欣觀
解脱すべき世界の素質
解脱の世界
付録 辨榮聖者御逸事（其の二）

炎 王 光

（宗教人類—消極—理感二性の素質。積極—靈化）

宗教意識は聖意に適せざる意志惡質を排す。炎王光は炎の能く闇を照し、理性を開發するに、炎能く物を焚くを事感を解脱し靈化するに比す。

煩惱多しと雖も、二種に分つ、一、理感。二、事感。

理感とは人の理（靈）性を覆ふ處の、煩惱、無明、所知障、見惑等、眞理を意識せしめず。

事感は生理的の罪惡、感性意志の惡衝動なり。

前者は先天的に理性を覆ふ、別に體あるに非ず、靈性未だ開發せざる、靈性潜伏状態を無明と云ひ、後者は苦惱及び罪惡、感情及び意志の惡欲望、惡衝動、動物的欲望また意志、我慾、肉慾。

苦惱（果）
迷事感（内容）
罪惡（因）

機制我を根本とし、動物的欲望、惡衝動を根本とし、貪瞋痴慢等。

迷理感（形式）無明

所知障—宗教意識開發して啓示及解脱靈化し心靈如來の神聖正義恩寵等智慧慈悲等を啓示せられて無上覺の靈性を知るべきを障る。

見 惑—邪教、邪師、邪思惟より起る處の眞理に逆ひ、邪見推理の意識を云ふ。

佛教に解脱の發足點を感情の苦惱を感知するにありとす。いかに苦惱を感知すると云はゞ、人の天性は我意幸福を求む。顛倒せる幸福主義のためには世界は我意に満足を與へず。因て苦惱と感ず。主我幸福主義の非なるを悟り宗教的意識に入るは道德的理性、苦惱は幸福主義の顛倒より感ずる處、主我を轉する時は苦惱の轉するのみならず、また苦惱は罪過の結果なるを知る時は、苦惱感情に換はるに、罪過感情現はれ來る。罪惡は無上道德秩序に背乖する情操及び行爲にて主觀の惡を邪と云ひ、客觀を惡と云ふ。

理性、感性二主義あり、理性主義は苦と惡とに對して甚だ冷なり。生死本幻化の如く、罪福悉空なりと感情を排斥する宗教は、理性は寂滅の理性のみを實とし、苦と惡とに實を認めず。

感性主義は生活の内容を重んず、故に苦と惡とは實に厭惡し、實に解脱せざるべからずと感ず。

完全たる宗教意識は理感二性を完うして一面に執せず。

三 聚 衆 生

四

衆生界は如來の法身を體とし、意志に實現せられたる世界相待機能團體にて、靈性潛伏す。天然の素質を有せる衆生を三聚に類を分つ。一、天然的不定聚、二、惡なる邪定聚、三、靈なるは正定聚。

不定聚とは人の天然の生理機能の中に心理機能を含有し、天然に規定せられ、靈性潛伏せるも未だ開發すべきを識らず、天則に素性を有し、個人目的の外に終局目的に協力せるも識らず、劣態なる凡夫なり。

邪定聚。靈性開發せざるのみに非ず、脱却すべき要素質を増長し、邪惡に決定、靈に背きたる性格の聚類。

正定聚。とは靈性開發し、感性解脱靈化したる靈格。理性開發するが故に形式的に法身と致一し、感性靈化するが故に如來の内容と同化し、自己の目的を犠牲にし、終

神人の致一と分別

一切の宗教主體の根底は絶対主體たる如來法身とす。一切の機能團體たる個々は天然の規定と生理機制に制限せられ、自己の根底本質に於て、形式致一の理性あることを識らざりし機制我を超えて、最深の奧なる真我を發見する時は自己の心靈即ち如來の一大心靈致一たるを識る。之を開發するは恩寵による。然れども始成に非ず、開發顯示なり。之を法身平等と云ふ。

感性は分別。人の感性は所動的内容動機。人の天然の感性の形而上根底は如來の意志に現はされたる觀念態にして機能團體の生理心理機能として、内容動機劣態また罪惡の衝動なり。

之を解脱靈化の爲に如來は一切智慧能より靈應身を現して、恩寵とし、之には如來

五

の内容豊備にして、衆生の信仰に對し解脱靈化の用をなす。之を報化差別と云ふ。

理性の根底は法身にして、平等絶対觀念態、超時間、超空間、超物質、超活動、純粹形式なり。

感性は事相にて、主體に對する客體と對比的なり。人性の無明闇黒に對して智慧光明、人の罪惡に對して聖靈態。

理性は大虛の如し、絶対なり。事相報應は太陽の如く、對比的なり。

理性は形式に於て一致し、感性は内容同化せらる。

理性主義には自己の根底なる絶対主體を發見し、自性天真佛として、宗教の全體を盡せりと謂へり。理性に偏し淡白の状態に陥り譬へば光のみにて熱なき太陽の如く、内容虚無にして活動なし。

感性に偏せる宗教は、絶対主體は實體なく、聖靈感の靈能のみを求む。熱のみにて光なき太陽と同じく盲動す。理感二性を全うして圓滿なる宗教意識なり。理性に於て絶対主體と一致し、感性に解脱靈化す。

六

宗教の機能的致一

如來の本質(實體)と靈能とは、世界及び衆生の根底たる心靈界に求むべし。如來は客觀的實在にあらず、主觀々念的實在なり。宗教的關係の機能は、人の精神の中に觀念として存して、外より來るにあらず、中と云ふも生理機能の中に非ず、一大心靈と連絡せる心靈の中にあり。

觀經に如來是法界身、入一切衆生心想中と。

導師釋して、法界は衆生界、身は如來なり、一切衆生の統一的根底は法身如來なり、故に衆生自己の最深の根底なる心靈界に如來を發見すべし。法界は如來の眞身心を體とし、また用とす。身心偏ねくして無碍の故に如來は絶対主體にして、一切衆生は局部的主體、如來と衆生との宗教的關係は觀念的機能致一なり。自己の心靈と一大

七

心靈との關聯なり。

八

如來と衆生との分別

如來は絕對心靈、衆生は機制物的個體。如來は一切總括する存在、衆生は局部有限相待團體、此團體は心靈局限を有せり、因果と目的とに現する理性あり。

個人の自定は、因果的にして、直に如來より定めらるゝにあらず。秩序の論理的必至は、法身の理にして、個人の心靈が終局目的の理性は如來の理性なり。

個體機能團體の變化は絕對心靈の統一總體に於ける局部變化なり。

衆生は法身の機能的顯現の一小局分、全體は法身なり。又機制心的個體は法身の性能に産出せられたる機能現象なり。

人は依他、偏計の二性帶る機能。法身は圓成實性。偏依の二性は如來の實性を離れては無本質なり。相待に對しては實在なり、各個體は局部現象にして、實性具ふるが故に實在なり。

産出の根底たる實性に對しては無本質なり。若し如來を離れ如來に背く時は、幻華の外得べきなし。

如來と衆生との致一

分別ありて解脱の要あるも致一なければ宗教の能なし。人は偏依の二性によりて如來の本質と分別すべきも、二性の根底は實性なり。實性は偏我制機我と、相待規定の因縁我との實性なり。實性は一切局限主體を組織し、世界相待團體の總體根底なり。根底をなす限に於て一致せり。

宗教關係の致一、自己の根底、如來の本體と致一なるを覺悟したる人は、内容は惡なるも、形式の致一を識るべし。形式の一致を覺るのみにあらず、内容が天然の不定と邪惡とを轉じて、如來の聖意内容に相應し、終局目的に參りて、始めて眞實の致一

九

なるべし。

10

形式の致一は、理性開發し、覺悟すべきも、内容の致一は、感性意志の解脱靈化によりて得らるべし。

内容を事相と云ふ。如來に報化の二身あるは、衆生の内容解脱靈化を覺らむが爲なり。如來の大用恩寵により、知見を覺られ、感情に融合し、主我の妄なるを識り、大我に融合し、意志靈化して、如來の目的を自己の目的とし如來の器具として活動す。自己の理性を開發して、自己全く圓實性と致一なるを覺り、如來の一切慧能によりて主我及び世界相待の中より解脱し靈化して、如來の目的に參與すること、形式致一は理性にして、内容は感性が如來の報應と相應し、己に主我を脱し、相待を超えて、實性を一とし、内容には解脱靈化の徳として、如來の目的を自己の目的とするに到れば、即ち正定聚なり。正定は不退の菩薩、如來を理想として、人類個人を超えて、如來を家とす。菩提薩陲、菩薩は如來の大道薩陲は有情即ち如來の觀念を實現せんとする正士の義なり、觀念我にして機制我にあらず。

世界の所依

世界は人類共同感即ち一切機能團體の依止する處、而も衆生と同じく、相待に規定せられ、絕對なる法身を體となす。

楞嚴に世界微塵も心を以て體と爲す。地水火風空大法界に周徧し、如來藏の隨緣循業の發現なり。即ち絕對心靈の意志に實現せられたる客觀々念態なり。

一、自然教には自然界の外に世界の實體を識らず、二、超然教には世界と實體とは、其體を根本的に異なる二元とす。實體と幻夢の世界、能造と被造と。理性教と感性教とあり。理性教には實體は絕對を全うして、世界は實在を無にす。感性教は神の絕對を完うしても世界の實在を立てんとす、感性教は神の能力の方面を取て實體を忘る、世界は神に造らるゝが故に實在なり。

11

理性教は實體のみを神として、感性は神の能より實現したる實在なるを識らず、故に現象世界は、根底なき空華の如しと。二教何れも偏して完全なりと云ふべからず。

圓具教は理感二性教を統一し、世界の實體は理性教と同じく絶對にして、世界は絶對心靈が意志に現されたる客觀々念態にして、實性を根底とする實在なり。

三性の中に世界は相待依他性、相互争闘の實在にして、實性を體とするが故に實在なり。若し實性を離れては因縁無性の故に實在に非ず。

故に世界は實性と依他性との二面あり、依他因縁性の方より是れは因縁を離れて、無性の幻華の如くなるも、實性による依他なれば實在的にして、實性は一方は永恒不動にして、他面は世界依他性として、隨縁顯動なり。顯動なる世界は、依他の故に實在、無性の故に無なり。

實性は顯動して世界依他性となり、依他は意志の勢力に妄動せらるゝ故に變轉極りなし。

依他性の世界は實性隨縁を體とする故に實在、因縁無性の故に假有なり。

生滅攝取の二義

世界は天則秩序に神の一切智能によりて顯現する法身の客觀的現象。

神は世界に對し一切能より常恒建設の事業なるも、之を建設するは因縁規定あり。

神は絶對なるも、世界は相待に規定せらる。

世界自らは、因縁無性、存在の形式のみにして、神の實性の客觀實現に、一切知能によりて生存擔保せらる。終局目的には攝取には、生滅に常恒産出を以てしたるに同じく、終局には、に換るに、心靈を開發して神的協力となす、世界の常恒不斷の顯動は、實性を離れては體なし、故に世界の活動は即ち實性の活動なり。一切の被造作は法身の絶對機能の中の局部機能なり。

終局は世界内容の常恒なる理性終局目的秩序。

神の一切智能の機能致一より神の觀念の顯動内容は意志に實現せられたるが、生産と意志に實現せられし内容は論理的な一切慧に決定せらるゝなり。世界は法身隨縁の常現象なれば、法身の本質は世界に含蓄的なり、一方は不變にして、

世界と心靈界

世界は相待規定、法身の意志に實現せられたる客觀々念態にして心靈界は本質に内容の無明垢質解脱して本質一切慧の靈象なり。

世界

世界は太陽系に屬する、機制的個體は意志の勢能に逼出され、相待規定なれば、機制的個體なり。人類と同じく成境を免れず。全體より云はゞ、法身無邊の故に現象の世界無終に至りて、成住壞空、空じてはまた成じて相續無終なり。如來藏性無盡の故に産出の世界も無盡なり。

解脱の靈能の世界

世界は解脱を總括する故にまた大なる宗教の主體なり。世界には消極積極の二面あり、消極としては、世界には人に煩惱の垢質あると同じく脱却せざるべからざる惡素質あり。絶對本質の心靈態を覆ふ處の無明及び意欲動搖の相待的の約束をなす性能の存在するは、この無明及び業力によりて解絶對にいたる解脱を惡業苦これなり、これを脱すれば絶對無規なる本體。

相待的には世界は宗教の能ある法身如來藏性を體とし、靈性を具せる一切の總括にして、この靈性を顯現すべき解脱の能ある世界として方便有餘土とす。

相待なる世界は絶對なる心靈界の終局目的に對する方便土とす。

世界は法身を體とし、無明妄動の爲に、相待の束縛を受く、無明妄動は、一切慧の光によりて照破せらる。

世界は法身を體とし、無明は轉すれば一切慧となり、一切の惡業は轉すれば目的に

協力すべき靈的活動と爲す。積極より云はゞ世界は法身の機制的現象にして、相待より絶對に、世界より靈界に進趣すべき方便土なり。

眞如不遠於此土求^二何處^一

相待虚無の苦惱は滅了すべき性を有し。

世界は幸福主義を轉じて方便土とし、菩提の道場とする時は、此土は忍辱精進の行處、菩薩の諸の行道の處なり、各自の潜伏せる靈性を顯はす爲に練修の道場なり。此土に於て一日一夜忍辱精進なれば、淨土に於て百歳するに勝れりとは深意あり。

世界厭欣觀

世界は解脱の要と能との二面あり。解脱の要ある世界しとて厭穢、能あるとして欣淨と云ふ。

- 一、顛倒幸福主義には最惡觀
- 二、宗教に入りて未だ解脱せざる時は濁惡厭惡觀
- 三、已に宗教に入りて解脱し心靈界に安立する時は最良觀
- 四、道德主義には悲壯遊戯地

人の天性は主我幸福の顛倒により、身の不淨を淨と、受は樂と、心を常住と天然を自由なりとし、然るに世界の天則はこの顛倒に對して假借なく、幸福主義には違逆することのみ、意志に満足を與へず、爲に世は惡のみと觀す。

次に宗教に入りて道に志す時は、世は自己の意志にも外にも惡の動機充滿し、五濁惡世は實に厭ふべき處と觀するなり。

三、正しく宗教にて解脱する時は、身は五濁に在りながら心靈は淨土に安立し、心靈の幸福を感受するが故に最良觀なり。

四に已に心靈淨土に安立し、如來の目的の爲め、慈悲の故に道德主義には菩薩は濁惡に出で衆生を度す。忍辱精進の爲には濁惡の世に好んで、甚深悲壯の濁惡世に於て

行すべき故に大人志幹は好んで惡世に出で度生す。

また遊戯園林地の時には菩薩は濁惡の世に忍が成就し、大慈 心遊戯地とす、論註に、往生を欣ふことは決樂の爲にあらず、一切衆生を度せんが爲、慈悲と度生の目的の爲には世界は樂欲の地なり、解脱の要と能とは宗教の目的なればなり。

解脱すべき世界の素質

絶對なる如來の實體、本然清淨と相待に生滅せる世界とを比する時は本質には本來あらざりし幻夢の如き無明より現する相を有す。

世界は無明の風に妄動の業力によりて有るも質性にあらず。無明滅すれば、業滅し業滅すれば生滅世界を感すべき元動なし。

眞性にあるべからざるもの妄動力によりて幻有なりと。無明妄動とは天則に一切能即ち意志なり。實體の潜勢より顯動に轉するは意志を開端の契機とす。恰も人の初生意識の意志發展せざる時、不識の意志なると同じ。世界は一切知によりて天則の秩序は整へらるゝも、不定なる意志動力より開端とす。之を無明と云ふは一切慧未だ開けざる意志は不定の動力なればなり。

業動力によりて現する處の世界に生死變遷の苦、無明等の惑あり、無明によりて諸の惑あり、業あり、生死苦あり、因果關聯して止まず。

曾て感業苦に實を執したりしも、覺め來りて觀すれば五受陰皆幻化の如くなりと知る。

尙進んで生滅幻化の世界本體は質性にして生死は力の運動によればなり。

世界は實體の現象にして、力に現されたる相待的に解脱の要とし能として、生死の體涅槃、煩惱の質性菩提なれば、曾て方便として必要なりし素質は、其實に

は脱却すべし、無明は眞性、覺來りて觀すれば、眼醒めて昨夢の如くなるを知る。初、世界には生滅の苦及惑は實在とするは天然

二、無明惑業にして幻化無性

三、世界業本菩提生死本涅槃(轉依)

(理性主義は理性のみを重んじ、感性の生死の苦、罪惡を幻化とし、また本菩提涅槃の性の外に惑と生死は無しとす。感性主義は、生死の苦と罪惡のすべて感性の實在を見て理體の……)

第三に世界は意欲不定意志の活動よりあるべからざる素質惑業苦を感ず。之を斷盡して而して解脱の最終に達するに非ず、一切慧によりて終局目的の心靈開發する時は生死の體本涅槃なるを悟り、煩惱本菩提なりと達す。

曾て妄動的の惑業は未だ心靈開發終局の眞理達せざる爲めにして、心靈開發して觀すれば、法身の表徳の世界にして娑婆即ち淨土

如來中の意志によりて實現せらるゝ世界なれば生滅轉變また如來の妙用なり。

不生不滅 生滅變轉また如來の妙用なり。

解脱の世界

大乘菩薩とは個人にあらず、一切衆生及一切世界を悉く解脱すべき宗教主體とする一の觀念なり。菩薩一衆生乃至無量の衆生を度せん爲に菩提心を發すに非ず、一切衆生乃至世界を度せんが爲なり。菩薩は國土を以て身とす。菩薩とは覺有情、上求佛果下化衆生是なり。

衆生の病我病なり、一切衆生病ある故我病あり、一切衆生の外に我なしとの一の宗教的理想なり。

人は神意の器具にして、目的を實現するが爲には、いかなる苦惱も甘受せざるべからず。菩提心は一切衆生同體の故に法身、個人が身を犠牲的に六度を行じて肉體死すとも觀念は數多の形の中にありて活動す。

同一理想の中に隊を伍して健闘し、身は死すとも觀念の勝利を以て、觀念が世界の

苦惱と罪惡に打勝ち、菩提心を生命とし、之が爲に肉を犠牲にすることを厭はず、甚深悲壯の假令身を諸の苦毒の中に止むとも、我行は精進にして忍んで終に悔す、個人の生命は全體觀念の犠牲とし宇宙解脱を目的とす。

個人解脱を主とするは弊聞として嫌忌せり。菩薩は宇宙解脱を我解脱とす。菩薩は大我を我とす、宇宙を身とす。衆生あらん限りは、苦惱と罪惡は絶ゆることなし。度斷の誓は菩薩一切衆生を度せずば我成佛せじ、衆生盡さざる故に菩薩の願も亦盡きず。

然るに圓融無碍の法門は、因果無碍にして、菩薩成佛する時一切衆生悉く成佛し乃至世界も成佛す、即ち一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛、是なり。

相待規定を脱し、心靈無碍の境に入らば、絶對なる理法と一切の個々と圓融無碍の相即相入自在の故に因門には盡未來際普賢の境界常恒に菩薩の願行を普く一切世界に施す、果分には無始已來ヱルナ佛自境界一切衆生と共に成佛す。かゝる心靈界不可思議の妙門に入らざれば、神の境界解すべからず。

相待規定の約束的に、宇宙の終局滅盡は時間的に期すべからず。實體無盡の故に現象また無盡、但し精神の轉する處に世界滅盡す。世界滅盡し已て後心靈顯現すと謂ふなかれ、如來現前する處に心靈界顯はる。

辨榮上人御逸事 (其二)

五香善光寺 辨誠 輯録

○ 上人曰、坊主が旅するに錢がなければ出来ないと言ふ様な意氣地なしでは駄目だ、禪宗では小僧を使にやるに態ざと小使を持たせずによつて、それで用を達して歸つて来るやうな者でなければ駄目だと云つて居る。

○ 上人、筑波山上の行成り玉ひて下山の途次、夏の日も既に暮れはてにければいづこにかその宿りをと尋ねさせ玉ひつゝありけるほどに、幸ひ程近きかなたに一寺院の在りければ到りて一夜のやどりを求めさせ玉ひけるに、中なる人の出で來りて當惑氣に之れを拒否みければ、上人如何にして得られまじきやを尋ねさせ玉ふに、中なる人の

二
答へけるやう「お宿し申上げたいは山々なれどごらんの通りの破れ寺で殊に今晚釣るべき一はりの蚊帳さへありませんので」と面はゆ氣に申しければ上人の重ねての玉ふやう「はあ、さうですか、では私は今晚蚊帳も何もいりませぬから、どこの隅でも一夜の露さへ凌がせていただけければ宜しいから」と漸くにして入り宿り玉ふに果してさの如く騒然たる蚊軍の襲撃は上人の頭面手足に遠慮なくいとど御安眠をぞ妨げにける。

○ 後日、上人談り玉ひけるやう、「あの時はほんとうに弱つたが、しかし私は若しこゝで宿めてくれなければ今頃はどこかで野宿でもして居らねばならぬが、まだそれよりはマシだと思つたら自然によく眠りにつきました。アノ時ばかりは狸窟で宿りましたヨ」と。

○ 海上蓬の八丈島は小金東漸寺有縁の地なりければ、上人の御師匠、靜譽上人などもしばしば御巡教せられたりき。適々、上人またこの一行に御隨行せられる折、時恰も海上波荒れて激浪甲板を洗ひ、船一上一下して木の葉の如く翻弄せられ人々眩暈と嘔吐に生きたる面もなかりける中に只だ一人上人のみ平然として安如たりき。後日人々のその如何なりしやを問へる時、上人の曰「はあ、私はあの時別になんとも思つて居ませんでしたヨ」と。某の曰く「もし船が沈没しましたら如何なされましたか」上人曰「はあ、沈没したら波に任せて流れて行くまでです、……あゝアソコを辨榮坊主が、頭が、足が、ぶか／＼と浮いて行くワイ」と思つて屈りました。

○ 上人一口、その昔筑波山上御修行中の一消息を談り玉ふやう「晝の間は人々が來るので岩窟へ入つて居りましたが、夜分は山上へ出て獨り冥想して居りますと、四邊聞として聲なく、山全體が我が體に成つて、ほんとうに心地が良ふございました。」

上人未だ御わかかりし頃の夏の一日、狂歌をものしたまふて曰く、

四

○ 朽ぬ木といましめあれど夏の日に

手枕にぬることのたのしさ

○ 朽木とてすてられぬこそ幸ぞ

我身きられてたまるものかや

○ ひるねしてはまぐりならばおしやかさん

ねないがよけれやおしやかなになれ

○ ひるねするよく見てたへよ孔子さん

あなたとあればごごとでもよし

○ 辨つくのさちがひ坊主がでたらめの

何をよんでも狂歌なりけり

○ おしやかさん孔子しやんでも理が理なら

ひけはとられぬ今の世の中

○ おしやかさま君は提婆がいやでしょよ

私はあなたのいましめがいや

○ 上人未だ東漸寺御修行中より宗、餘乘に精通し玉ひ解行ともに衆に超へさせ、山主

五

の命によつて先輩同侶のために講説し玉へることしばしなりき。山主の曰「辨榮の話しは在家むきにはチトわかりにくいか知れんが、僧侶仲間には至極結構ぢやワイ」と。

六

○ 上人其のむかし阿彌陀經の功德を讀じ、自ら訓讀阿彌陀經圖繪を刊行普及せしめ玉へること幾萬部、世人周知のところなり。然るに一日信者山崎某氏にの玉ふ様「阿彌陀經はそれほど有りがたいものではない」と。某氏訝り顔に「何故ですか」と尋ぬるや上人の曰く「はあ、あれはネエ、樂りで云へば丁度効能書のやうなものです」と微笑し玉ひき。しかも上人また時々これを勧め玉ふことかはらざりき。

○ 二人の禪僧あり。一流の幢幡風に翻々たるを見て直ちに學道の問題とし、

甲「あれは風が動くのだ」

と云へば

乙「イヤ幡が動くのだ」

と互に論談應酬しける程に、これを六祖慧能禪師の前に繰さんとす。

師の曰「風の動くのでもないまた幡の動くのでもない、即ち汝等の心が動くのだ」と一轉語せられたることである。

○ 一日、末弟此話を提して上人に問ふて曰く「果して二者共に動せずして心のみ動するや」と。上人微笑し玉はく「はあ、あの時はあれで良かったのだ」

○ 一日某氏、上人に問ふて曰く「私共の邊ではお葬ひを出す日に友引と云ふ日を大そう忌みますが、一體あれはどんなものでありませうか」

上人の曰く「世間ではよくそんな事を申しますが、然し若しそれ程氣にするなら一そう死ぬる日を友引にしない方がよさそうなものでありますが、死生命あり、でそう

七

勝手自由には参りませんネエ、まして葬式はその亡き骸を棄てて行く日ではありませぬか」と。

○ 上人某寺御留錫の砌、一求道者あり、始めて來り拜してその御説法を謹聴しける折、適々上人御腹部の加減こそ善かりけん、ブツツと御放屁し玉へど別に御氣にもとめさせで諒々乎として御進講し玉へり。后刻某夫人、一室に來り上人へ茶菓をすゝめ參らせんとするの序に申すらく「お上人様もあんまりお人が悪うございますヨ、あのお仁はまだ此のたびが始めてでございましたのに、——あんな大きなおナラをなさるとワー」と。上人聞かせもあへず、「はあ、そうでしたか、何もそんな捨てるものを捨はずとも、捨ふものは澤山ありましたのに」と申されけるとなん。

○ 某小學校、曾て上人を聘して兒童のために一場の御法話を懇請しけることありき。上人開筵にさきだちて先づ兒童の爲めに十念を唱へ玉ひぬ。御歸院の後隨行せる某師の問はく「先刻お上人は兒童のために十念をお授けになりましたが、一體なんと云つてお唱へになりましたか」と尋ねければ、上人の曰く「汝等應成等正覺者、我今稽首禮」と答へ玉ひける。

○ 僧あり、洞山に問ふ。「如何か佛」

山、云、「麻三斤」

僧あり、法眼に問ふ。「如何なるか是れ學人の佛」

眼、云、「丙丁童子來つて火を求む」との古人の話に因んで、

末弟曾て上人に呎尺しける時、佛の意義に付て上人より質問の征矢急に、これを避くるに暇あらざりければま、ヨと逆襲的に、却つて問ふ「佛とは何ぞや」と反問す。

上人言下に曰く、「ソレ佛に三身あり、一に法身、二に報身、三に應身……天地萬物

八

に秩序あり條理あるは法身の一切知にして、一切の運轉活動は即ち一切能の功用なり……乃至、この三身たるや本來即ち一身なり……」と流るゝが如し。

○ 「佛に三身あり……」嗚呼、その生き生きしきパネの如き一轉語は今尙瞭然として耳底に當時をかなでつゝあり。知らず人去つて何處にか在る。只まさに千古に悲風を動すべし。

○ 問ふ「三界無法、何れの處にか法を求めんや」

○ 上人曰「無法の法もまた法である」

○ 一人上人に問ふ、曾て聞く(鐵翁畫談)主命を帯びて遠く來り乞ひし久留米の藩士某の激怒に對し、冷笑一番、「衲が首は得べし、衲が蘭は得べからず」と萬丈の氣焰に聞くものをして尙今日に至るまで襟を欵めしめたる寫蘭の名家、鐵翁禪師の云へることあり、曰「蘭を寫さんには先づ安心を了すべし」と。西行また中年に出家して徒らに和歌のみに耽り歩るゝ、しかも云、出す所の言句皆眞言、此歌即是如來の形體」と。或は元政法師が詩歌の道は即是定慧の二法なり」とのことなりき。

○ 借問す、西行、元政のことは暫く措く、鐵翁もとこれ畫家に非らず、寫蘭の安心作廢生や。

○ 上人曰く「一念不生の安心と寫蘭の安心と、若し別とせばまだ安心を了得せぬのである。寫蘭の安心即一念不生である。」

○ 問ふ、元政法師の曰「草紙を折るにも是も修行なりとて自ら折られ、戸のあけたても鳴らぬやうにするは見聞のよからんためにあらず、心をおさめんためなり。凡何事も修行にならぬことはなし、物を二つにするは皆根本にもとづかぬゆゑなり」云々と。此義念佛行者として如何なるや。

九

一一

上人曰「念佛行者との比較、若し心から己に彌陀と同化した上はたとひ口に稱名せずとも其一切の作爲悉く念佛ならざるなし、事業即ち彌陀の聖意が業に現はれたことなれば遠つて立派な佛行であり候、念佛といはゞ口に稱ふる斗りにあらず、如法（念佛）の心より爲す業は佛を身の業に現はすことなればソレハ口已上の念佛にて候、一體従來の念佛行者は只口斗りを重く見て身に佛行を爲すを敢てせざるは發展の度低きなり」と。

○

東京日本橋區の富豪、河村某氏は久しき以前よりの篤信者なり。そのかみ家に十六七斗りなる一人の娘ありき。サル程に上人ひさしくにて其家を訪づれ玉ひける時、幸ひ翌日は日曜日にてありければ「明日は丁度日曜日ですから皆さんにご信仰の話をいたしますからどうかお友達さんを誘ひ合せてお集りを願ひますやうに」と依頼し玉ひけるに、

娘の曰く「それはまことに有りがたいことでございますが、實は明日はお花の稽古日でありますから誠にナンデスが、此の次におこし下さつた時にお願ひいたしたうございませう、いかがでありませうか」と答へければ、

上人の尋ねさせ玉ふやう

「はあ、一體そのお稽古は月に何回ありますか」

娘「ハイ、日曜日ごとにありますから、月三四回あります」

上人「さうですか、シテお花の稽古をしますとどんな徳がありますか」

娘「それは先づお花の生げやうですが、ひいては色々身身の行儀作法なども教へていただきますので、私共のやうにこれから家庭を持たねばならぬ者のためにはまことに結構なことと思ひますので……」

上人きゝ終らせての玉ふやう

「なる程、それも至極結構なことではありませう、が然し、私が明日皆さんへお話し

いたしますのはそれよりモットく大切な、心の花の生げ方で、これは萬物の靈長として生れて來ました吾々人間は皆誰彼の別なく、何は兎もあれまづ第一に知らねばならぬ信仰の道であります。その他のことは皆な枝葉です、特にご婦人と信仰とは最も緊密な關係にありますのでご婦人方は一しほと心がけていたゞかなければなりませんのであります。尙おきゝ申せばお花の稽古は月三四回もおありと云ふことですが、私はこのたびは漸く三年目で巡つて來ましたのです」と。

そのおんやさしき中にも一條の威嚴を示させ玉ひけるに、適々別室にて漏れきゝ玉へる母人のお出でまして平頭我子の不明を謝し、翌日は多くの人々を集めさせてそのみを拜聴せしめられき。

後日此の娘成人して一家の主婦となりけるの日、當時を逃懷すらく「ほんとうにあの時は若氣のいたりであんなご無理なことを申上げたのですが、實際今日になつて見ますとアノ時お花の稽古を一日や二日休んだとて何んの痛痒がありません、却つてあまり心にも進まなかつた、お上人様のお話が爾來何かにつけて膝々と胸にこたへ、今日まで日常の上にとれ丈けの慰安になり、力になつて居ることかわかりませぬ、そして將來もまたこの信仰の力によつて日々の生活の中に意義と向上とを認めつゝ進まさせていたゞけますことを思へば何んと云ふ幸福な身の上であります」と常に感謝しけるとなん。

○

上人、一日相戒めて曰「寺院に園芸等の器具を備へて技を弄するが如き暇が、何時あるか」と。

○

一日、諸の奇蹟に付て尋ね參らすに、

上人曰「肉の幸福を目的とする奇蹟は幼稚なる宗教意識にして、信仰によりて惡心を轉じて善心と化し凡夫を變じて聖者と靈化するが如きは高等なる奇蹟なり。或は一

生造惡の惡人が臨終に獄火現前して苦惱に逼る時、善智識の教へに隨がひ改悔の一念に獄火變じて清涼の風と爲り金蓮華日輪の如くに現じて淨土に往生す、とは斯等は高等なる奇蹟なり。」

○ 上人曰「從來先德の中でも哲學と宗教とを混同して居られた方々が多い、それは教祖釋尊に就て二面觀あることを混同して居られたからだ。二面觀とは一、大哲人としての佛陀。二、大宗敎家としての佛陀である。」

一、大哲人としての佛陀は、宇宙法界の實相が即ち衆生の自性にして之を開示すれば十方法界三千の妙理悉く自己の口より顯現す、清淨身と云ひ、寂光土と云ひ他に求むるに及ばず、自心の曼陀開く時は正覺の光明が顯現す、此光明の照らすところ即ち清淨身に於て寂光土である、故に佛陀は諸法實相たる自心を開發して正覺を得、大涅槃に入る可きことを教へ玉へり。

二、大宗敎家としての佛陀は、法界宮の中心本尊たる無量光如來に歸命信賴せよ、如來の光明に攝化せらるゝ時は心靈更生し、身は此土にあり乍ら神は光明中の人となり理想の淨土に在りて彌々報命盡る時は眞實報土なる大涅槃、常樂我淨の土に歸入す」と。

○ 又曰「大宗敎家としての佛陀は聖道的に、汝等自性の清淨を發見せよと教へ玉はず。宇宙に大なる大光明者を信念せよ、衆生は悉く大なる如來の子たる佛性の卵を具へて居る、報身如來の大光明に攝化せらるゝ時は必らず大なる親は親近し、管に親を知見するのみならず親の全き如く保養せらるべし」と。

○ 又曰「聖道としては眞理に悟達することを期し、宗教としては今現に活ける如來を信念して靈の復活を期す」

○ 又曰「佛陀が種々の法を以て衆生を誘引し給ひしかども實は方便にして、眞實に宗教としての衆生敎化の法は此の如來の光明に攝化せられて成佛する外に道あらず。他は但だ斯の眞理を示す方便にして哲學的に其の理を知らしめ其の議を弄せしに過ぎず」と。

(以下次號)

大正十四年十二月二十五日印刷
同 廿五日發行

誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)
年十二冊二圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
發行人

東京市小石川區荻荷谷町九八
印刷人 小林七太郎

發行所 東京市小石川區水道端二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番